

豆紙人形の感動再び



パリのラフォンテーヌ中・高校で開催されたマサコ・ムトー遺作展

「こんなに小さな人形をどうやって作ったの」。パリの中高生たちが感嘆の声を上げたのは、マサコ・ムトーさんの豆紙人形だ。ムトーさんは1年前の6月4日、93歳で亡くなった。その遺作展が先ご

ろ、パリで開かれた。

ムトーさんは夫の死後、緑内障に悩まされながら70歳でカルチャーセンターに通い初め、若い時からの希望だったパステル画を習い始めて個展まで開いた。88歳からはさらに、手のひらに乗るような小さな豆紙人形を作り始めた。

作品は「出初め式」「節分」「七夕」「金魚すくい」「緑日」「大掃除」といった懐かしい日本の行事や習慣のほか、「日本のお伽話」「源氏物語」「聖書物語」などをテーマにしている。長女のヒロコさんの「海外の人にも知ってもらいたい」との熱意から

2003年秋には米シアトルで、04年6月にはパリで個展が開かれ、入場者の感激を呼んだ。

パリでは05年1月にアンコール展も開かれ、展示後に130点が日本大使館、パリ日仏会館、日本人学校、アメリカン病院など5カ所に寄付された。遺作展はムトーさんの1周忌の機会に、これら130点に、最後の作品となった「東海道五十三次」から4作品を加え、パリ市内のサンシュルピス教会、日本語の授業があるラフォンテーヌ中・高校、パリ郊外の日本人学校の3カ所で開かれた。

会場では雨のような音がする民族楽器レインスティックの奏者でダンサーの卑弥呼（本名・井出智子）さんが即興のパフォーマンスを披露。豆紙人形によって生徒だけでなく、父母らも日本の風習に親しみ、改めて故人の才能と人柄をしのんだ。

(パリ 山口昌子)